

優秀賞

心温まる親切

徳島県 徳島文理中学校一年 川原 綾香

私は、通学にJRを利用してゐる。まだ慣れない中学生生活に疲れがたまっていたのか、ある朝、登下校を共にしている友達が、

「気分が悪くて、もどしそつ。」

と言い出した。確かに顔色も青ざめていて、JRに乗ってもすぐに座り込んでしまったのだ。とにかく私は、お手洗いがいかとあたりを見回した。しかし、朝の通勤ラッシュの時間帯と重なっているため、満員電車で私の周りは、私より背の高い大人達ばかりなのだ。背伸びをしたり、ジャンプをしたりしたが、何の効果もない。友達の方も気になったので、ふと友達の方をふり返ると、そこには、もどしてしまい、苦しうにうずくまっている友達の姿が目に入った。私の頭の中は、一瞬にして真っ白になった。どうすることもできなかった。

すると、前の座席に座っていた二十代ぐらいの女性の方が、とっさに友達に席を譲って下さった。それだけではないのだ。友達がもどしてしまつた汚物を片づけて下さっているのである。その時、気がついた。汚物を片づけることもできずにただ立っているだけの自分の姿があつた。そんな自分が情けなかつた。私にも何か協力できることはないかと探していると、女性の方がおっしゃつた。

「車掌さんにも知らせて、新聞紙があるか聞いてきてもらえますか。」

私は、満員電車の中、人ごみをかきわけて車掌さんを探した。やっとの思いで車掌さんを見つけ出し、友達の状況を伝えると、車掌さんもとっさに動いてくれ、新聞紙を持って来て下さつた。新聞紙を持ってきて下さる間にも周りの人達は、心配そうな顔で見つめて下さり、ティッシュ、それにハンカチまで差し出してくれた人もいた。途中の

駅で降りる人の中には、こんな声を掛けて下さる人もいた。

「友達のために頑張つてね。」

私は、嬉しくて涙が出た。

また、汚物を片づけて下さつた女性の方は、途中の駅で降りるといふことで、汚物がついたティッシュや新聞紙をかかえて、降りていった。その後ろ姿は今でも目に焼きついている。

そして、徳島駅に着き、友達と最後の方に降りると声を掛けられた。私より年上の中学生だつた。「良かったら、お水でも飲む?」

友達は遠慮して断つたが、心の中は感謝で胸がいっぱいであつただろう。私も同じ気持ちだつた。

今日の日本は、毎日のように残酷な事件がとびかい、多くの人々が悲しんでいる。私は、今回のことで日本にも、人を思いやり、人のためにつくす人がまだまだたくさんいることを実感し、感動する事ができた。今後誰かが困っていたり、苦しんでいたりの場面に会つたら、あの助けて下さつた女性の方や周りにいた人々のように、私も手を差しのべたい。

